

お彼岸 — 彼岸に向かって、今を生きる —

お彼岸は「暑さ寒さも彼岸まで」と人々に親しまれ、春分と秋分の中日ははさんで一週間、各地のお寺や別院では『彼岸会』の法要が勤まります。大勢の家族連れのお参りで賑い、仏「ほとけさま」に手を合わせ、お念仏の声が聞こえてまいります。

彼岸は、本来「到彼岸」といって、仏教の大切な教えであります。煩惱の迷いの此岸を離れ、仏のさとり彼岸に渡るという意味であります。彼岸に対して、私たちの煩惱の世界を「此岸」とよびます。苦しみの此岸を離れ、明るい仏の世界に向かっていくのを「彼岸に到る」といいます。そして、その実践の行を「六度の行」といい、インドでは「波羅密」といいます。

- 一. 布施 …… 執着を離れ、施しの行をする
- 一. 持戒 …… 仏の教えに従い、正しい行為をする
- 一. 忍辱 …… 苦から逃げず、現実に立つ
- 一. 精進 …… できることを精一杯、努め励む
- 一. 禅定 …… 乱れる心を静め、平穏な心をもつ
- 一. 智慧 …… 真理にめざめ、正しい道理に従う

この六つの行であります。現代社会において学ばなければならない大切な事からです。

親鸞聖人は、彼岸を浄土と仰ぎ、私たちの人生の依り処であり、また、帰るべき処であるとおっしゃっています。『浄土和讃』に

安楽浄土にいたるひと

五濁悪世にかえりては

釈迦牟尼仏のごとくにて

利益衆生はきわもなし

(『真宗聖典』四八〇頁)

と述べられています。

私たちの帰るべき処は、阿弥陀如来の浄土であり、その浄土を依り処として、今を生きる場が此岸とうなずかれてきます。浄土の光に照らさせて、此岸を生きる私のいのちが輝くのであります。浄土の真実を宗として、今を生きる。それが浄土真宗、南無阿弥陀仏のはたらきであります。

先日、夫を心筋梗塞で亡くされた四十代の女性からお尋ねを受けました。

私は夫を亡くす一ヶ月ほど前に、実家の母を亡くしました。実家へは七日ごとに夫とお参りました。その矢先に、今度は夫が続いて亡くなり、ある人から「二度あることは三度あるから、どこかで見てもらったら」と言われました。ご住職さんどうしたらいいですか。

私はそのお方に「心配ありません。大丈夫ですよ。大事なお二人を亡くされ、これ以上の苦しみはどこにもありません」と申し上げました。苦しみのなかにありながら、それ以上の苦しみにおびえる私たちを見守り、引き受けてくださるのが阿弥陀如来さまです。

春・秋の彼岸会はあらためて仏「ほとけさま」との出遇いを喜び、今を生きる力とさせていただく絶好のチャンスではないでしょうか。

岡崎教区安楽寺住職 伊奈祐諦